

「2015年9月26日開催 国際P2M学会 2015年度 秋季研究発表大会報告」

国際P2M学会実行委員会

2015年9月26日に 国際 P2M 学会設立10周年記念大会として 第 20 回秋季研究発表会(午前) The 3rd International Conference of P2M(午後)を開催いたしました。記念大会テーマは「アジア・パシフィック地域における産学官連携とプログラムマネジメント」です。

第 20 回秋季研究発表会(午前)では個別研究発表として 5トラック 21編の発表がありました。各トラックの座長から発表内容まとめのご報告がありましたので掲載いたします。



会場の千葉工業大学
津田沼キャンパス 7号館



*** 個別研究発表内容 ***

- Aトラック プログラムマネジメントトラック 座長: 出口弘氏
Bトラック アーキテクチャー・プラットフォームマネジメントトラック 座長: 新井信昭氏
E-1トラック P2M関連の自由論題トラック 座長: 鴻巣努氏
E-2トラック P2M関連の自由論題トラック 座長: 白井久美子氏
E-3トラック P2M関連の自由論題トラック 座長: 岡崎昭仁氏

*

A-1: 重藤さわ子、堀尾正鞠: 分野横断・「共-進化」型研究開発プログラムマネジメントとその検証
A-2: 垣本隆司、久保裕史: 単純化したビッグデータ解析フレームワークを用いたプログラムマネジメントの検討

A-3: 濱田佑希、越島一郎、渡辺研司: P2Mの共同組織への適用と状況マネジメントに関する研究

B-1: 山本由美、山本秀男: 創薬プログラムのプラットフォームマネジメントの構想

B-2: 佐藤達男: プログラムマネジメントの実践的手法としてのワークショップの可能性

B-3: 猪野晃平、田隈広紀: 製品コンセプト反映に着目したモジュラー・インテグラル混合型 3S モデルの提案

B-4: 櫻井拓巳、田隈広紀: スカイツリータウンキャンパスにおける創発的サービス企画のプラットフォーム

E1-1: 下田篤、山崎晃、五百井俊宏、久保裕史: R&D プログラムマネジメント実践のためのプロセスモデルの提案

E1-2: 加藤勇夫、楓森博、越島一郎: 研究開発プログラムにおける顧客価値獲得メカニズムに関する考察

E1-3: Seiichi FUJII, Yoshiaki WADA, Tomoya NAKAMURA, and Geunhee LEE: Human resources study as the gate function in the research and development process

E1-4: 渡辺貢成: 21世紀型グローバルビジネスのための新戦略の提案

E1-5: 上岡恵子: 戦略的 ICT 投資の運用段階における ICT 投資評価プロセスの研究—プロジェクト&プログラムマネジメント、PMBOK©、IT 投資価値評価ガイドライン(案)の比較評価と新たな評価プロセスの提案

E2-1: 松田隆聖、田隈広紀: 創発的地域活性化事業におけるコンフリクトの傾向と解消手段の研究

E2-2: 谷口邦彦、中川功一、小林敏男: 大学における産学連携の制度整備と共同研究創成活動との関連分析

E2-3: 三森八重子: 再生可能エネルギーを使った地域活性化の分析: つちゆ温泉の事例から

E2-4: 楓森博、加藤勇夫、越島一郎: 社会価値実現のための P2M フレームワークの考察

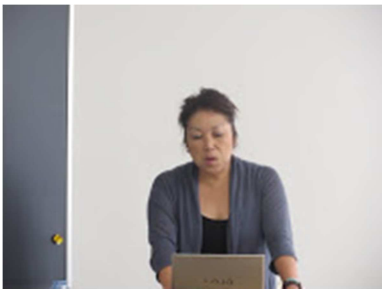
E2-5: 西田絢子、越島一郎、梅田富雄: P2M フレームワークからの産業クラスター計画の実施方法の考察

E3-1: 亀山秀雄: 科学技術イノベーションにおける価値創造プロセスと P2M

E3-2: 山中理恵: 企業向けソーシャルネットワークを活用したプラットフォームマネジメント

E3-3: 山根里香: 研究開発プロセスにおけるリーダーシップのあり方とマネジメント機能について

E3-4: 権藤俊彦、長沼将一、富田里枝、富田剛史、玉木欽也: 観光客と地元を結ぶイベントプロジェクトにおける Global-CEP の役割の検討 アサクサ・コレクションの事例



～各トラックの発表者写真は 発表の一部を掲載しております～

◆プログラムマネジメントトラック 座長: 出口弘氏

A-1

分野横断・「共-進化」型研究開発プログラムマネジメントとその検証

重藤さわ子(東京工業大学グローバルリーダー教育院)は、JST 社会技術研究開発センターで筆者らが取り組んだ環境・エネルギー分野の研究開発プログラムマネジメントについて、P2M 理論に照らし合わせながら検証を行い、分野横断的かつ中長期的な社会的課題解決に向けた研究開発での、社会の多様な主体が共に取り組み共に進化する「共-進化」型マネジメントの重要性とそのありかたを論じた。さらに、こういった分野横断的かつ中長期的課題を扱うプログラムの「価値指標」の設定やそれに対するプログラム内外での認識の共有・共-進化について、大きな課題があることも示した。

A-2

単純化したビッグデータ解析フレームワークを用いたプログラムマネジメントの検討

垣本隆司(ネクストエナジー・アンド・リソース(株))は、ビッグデータ解析を含むプログラムでは、非専門家によるマネジメントに困難があることを指摘した。そのうえで、スキームモデルとして、非専門家でも容易にマネジメントできる「単純化したビッグデータフレームワーク」を提案し、ヘルスケア系や環境系等への適用事例を示した。同時に、「プロジェクトにボトルネック要因がある場合と、ない場合の進め方を対比して検討する実務的フレームワーク」を提案し、ビッグデータ解析など難易度の高い研究テーマを含むプログラムでも有効に活用できることを示した。さらに、これらのフレームワークを、ステージゲートで活用したり、ビッグデータ解析を用いた ROI 検討に適用したりすることで、3S モデルに適合することを示した。

A-3

P2M の共同組織への運用と状況マネジメントに関する研究

濱田佑希(千代田化工建設)は、同一企業内や主力企業主導のプログラムでは、プログラムミッションの分割・展開を問題なく実施でき、受け入れ可能であることを想定していることから、大規模かつ長期的な事業においては、各ステークホルダーが共同できるミッションの設定と Win-Win のマネジメント体制構築が不可欠であると述べた。また、共同でプログラムが行われる場合のミッションの分割と展開は、各々の組織の状況に合わせ、柔軟に対応できるマネジメントが重要であるとし、SWOT 分析と IDEF0 を組み合わせた組織間連携の状況対応戦略の策定方法を提案した。聴講者からの「提案された方法が適用できる場面」についての質問に対し、濱田・越島からは「計画が固まっていない状況でも、計画の詳細が詰められた状況でも適用できる手法である」、と説明された。

◆アーキテクチャー・プラットフォームマネジメントトラック 【報告者:座長 新井信昭】

山本由美(中央大学)は、わが国の治験実施体制では、患者を含むステークホルダーが一堂に会する場が実現されていないことを問題状況と指摘した。そのうえで、米国の医薬品開発で活動しているMMRF/MMRCプラットフォームを参考にした、プラットフォームが備えるべき機能とマネジメントの要件、について発表した。山本は、患者が積極的に治験に参加してこないという認識であったが、患者を父に持つ参加者からは、「そもそも治験という場の存在を知らなかった」、という意見が出され、PR強化など、すぐに対処可能な改善案が提案された。発表者と参加者の一体性を感じる、素晴らしい発表の場であった。

佐藤達男(東京農工大学大学院)は、すでにP2Mで採用されているロジックモデル、バランス・スコアカードなどの実践手法と連動する、多様なステークホルダーが協働して新たな価値を共創するための手法として、「ワークショップ」の導入を提案した。アジャイルという考え方が導入されているが、参加者からも様々な意見が出され、今後の研究開発への期待が感じられた。

猪野晃平(千葉工業大学)は、自動車開発について、効率性と製品コンセプトの実現性を両立させる開発プロセスを提案した。従来はインテグラル型であった自動車業界が、モジュラー型に移行している旨の報告があった。また、「価格・COM」などを用いて、需要者がどのような点に自動車の価値を認めているのか、という調査の結果も示された。「車が好きですか」、という参加者からの質問に対し、発表者は「はい」、と間髪入れずに答えた。「好きこそものの上手なれ」、ではないが、「好き」をエネルギーとした、さらなる研究が期待される。

櫻井拓巳(千葉工業大学)は、所属大学がスカイツリータウンに持つサテライトキャンパスに、「創発的なサービスを企画するSNS サービスプラットフォーム」を実装運用し、その結果について報告した。まだ、途中報告の段階であるが、今後はプラットフォームを運用する上での人的な動機づけや適用範囲の拡大に取り組み、サービスモデルを支援するマネジメントツールの確立につなげていくことが期待される。

以上

◆P2M関連の自由論題トラック 【報告者:座長 鴻巣努】

1件目は、「R&D プログラムマネジメント実践のためのプロセスモデルの提案」と題した発表である。複数の有機的に結合されたプロジェクトを、全体を俯瞰したうえで、タイムリーなマネジメントを行うためのプロセスモデルについて研究したものであり、R&D プログラムマネジメントにおいて実行可能な提案が発表された。R&D プログラムの進行に応じて、どのようなことに注意してマネジメントすべきかが把握できる。提案されたプロセスモデルに基づき、実際のR&Dプロジェクトの記録を分析した結果によって、その有用性が示された。会場からはプロセスの関連付けや評価自体のチェックの方法に関する質問があり、今後の展開をふまえた議論が展開された。

2件目は、「研究開発プログラムにおけるBSCのスクラム型マネジメント構造(タイトル変更)」に関する発表である。本研究は、BSCを企業の研究開発プロセスに適用し、研究開発のためのマルチプログラム・プラットフォーム構造とそのメカニズムに関する研究に続くものである。本報では、BSCを時間軸方向に展開し、マルチプログラムをマネジメントするBSCのスクラム型マネジメント構造について発表された。会場からは、全体のオーケストレーションはどのような人材が担うのか、提案されたスーパープログラムの運用、プログラムが直接やりとりをすることの問題点などについて質問があった。また、本提案によるESのマネジメントについて意見が求められた。

3件目は、「研究開発プロセスにおけるゲート機能としての人材研究」と題した発表である。本研究は食品メーカーにおいて革新的製品開発に貢献したキーパーソン人材の分析に関する報告である。調査の結果、こうした人材の存在と活動が明らかとなり、研究開発におけるゲート機能としての役割を果たす可能性が示された。PC(プロダクトチャンピオン)、SI(シリアルイノベーター)の役割と機能が紹介され、こうした人材がブースタの機能をどう満たすかについて意見交換がされた。また、制度としてPCやSI人材をつくるためにはどのような取り組みが必要か、について議論された。

4件目は、「21世紀型グローバルビジネスのための新戦略の提案」である。本研究は、日本の家電製品を中心とした製造業が、新興国に対する地道なマーケティングを実施することなしに新興国市場で敗北したとの問題意識から、今後の産業が戦略的に戦うべき場に関する議論が示された。4つの事例として、金融、製造業、観光、コミュニティに関するバーチャル空間からリアル空間への展開について示され、21世紀型のグローバルビジネスの形として研究成果が示された。会場からは実行に移すための具体的なプロセスやマネージャの行動に関する質問があった。

5件目は、「戦略プログラムとしてのICT投資評価プロセスの研究」である。戦略を実現し競争優位を獲得するための戦略的ICT投資について、投資意思決定とその継続的評価に関する調査について報告された。P2M、PMBOK、IT投資価値評価に関する研究調査の比較検討により、戦略的ICT投資における評価プロセスが提案された。調査範囲の妥当性や評価指標の妥当性に関して議論された。生産業における設備投資と比較し、ITC投資の評価には難しい側面があり、今後の研究に期待が寄せられた。

◆P2M関連の自由論題トラック 【報告者:座長 白井久美子】

E2-1

創発的地域活性化事業におけるコンフリクトの傾向と解消手段の調査研究

松田隆聖(千葉工業大学)は、地域活性化に向けた創発的プログラムを対象に、人的なコンフリクトの発生傾向とその解消方策の指針を報告した。再生可能エネルギーを用いた地域経済活性化に取り組む創発的

プログラムの参加者に、活動レベルに応じたコンフリクト要因と、その解決策をアンケート調査し、調査結果を基にコンフリクト発生の傾向と、その解決に向けた指針を導出した。地域活性化事業は多義性・多様性が高く、「共通感に基づく緩い統合」を背景とした、人的シナジーやスケールメリットの創出、プロジェクトおよびそのメンバが創発的に活動することが求められており、P2Mの適用が効果的であるとした。

E2-2

大学における産学連携の制度整備と共同研究創成活動との関連分析

谷口邦彦(大阪大学大学院)は、これまでP2M(Ver. 2)を基盤とした4フレームモデルに、制度整備と連携活動を配した産学連携共同研究マネジメントモデルを構築し、共同研究の成功要因を抽出するため、大学への実情調査を実施してきた。産学連携による共同研究創成活動は、概して担当者の「カン・コツ」に頼る部分が多く、その実態は各大学によって大きく異なっていたが、成功裏に共同研究創成活動を進めた産学連携部門や担当者には、その背後に共通の手法やそれを支える制度がある、と示唆した。今回研究報告では、産学共同研究マネジメントモデルを基にした実情調査を基に、産学共同研究創成に連携部門が関わった創成割合で層別・検定を行った結果、制度整備の内容と大学間の制度整備の水準との間に関連性があることをプラットフォームマネジメントの視点から導出した。

E2-3

再生化エネルギーを使った地域活性化の分析:つちゆ温泉の事例から

三森八重子(大阪大学)は、太陽光、風力、地熱、バイオマスなど多様な再生可能エネルギーの中で、燃料が不要で環境にやさしくCO₂排出量が少なく発電効率が良く長期的な稼働が可能である小水力発電の有効性について示唆した。小水力発電は、地産地消型のエネルギーであり、地元のコミュニティが立ち上げ、運営するものが多い。福島県のつちゆ温泉の事例をもとに、小水力発電とバイナリー発電(地熱発電)をくみあわせることでそれぞれの稼働リスクをヘッジし、再生エネルギー事業に加えて、体験学習施設やサマースクール事業の展開、魚介類の養殖事業を組み合わせることで再生エネルギー事業のリスクをヘッジできることを分析・導出した。

E2-4

社会価値実現のためのP2Mフレームワークの考察

楓森博(名古屋工業大学大学院)は、持続可能なCSR経営では企業の経済的価値創出活動と社会的価値創出活動とが有機的な関係であることが必要と示唆した。帰着点を社会価値の実現に置いた事業推進は、組織体を益する価値創造活動であることが求められ、組織体間でパートナー関係を構築する際、如何なる点で価値共有が可能かを見極める必要があると説いた。社会価値に関わる組織を、企業、NPO、行政に分類し、社会価値との関係性を示すことでP2Mフレームワークとの関連性を示した。さらに、顧客価値が企業

内部のプロセスに反映されている事例に着目し、価値共有プロセスを P2M フレームワークに反映させるための要素を報告した。

E2-5

P2Mフレームワークからの産業クラスター計画の実施方法の考察

西田綾子(株)アspros)は、産業クラスターは地域活性において重要な戦略であり、経済産業省の産業クラスター計画への P2M からのアプローチが必要であると示唆した。産業クラスターの構築及び各参加企業におけるプログラムの実施方法や、産業クラスターを構築した際の複数のプログラム集合体をスーパープログラム(仮称)として、P2M のフレームワークに基づき単一プログラムに関する標準プロジェクトモデルと同型性を保ちながら、新たにスーパープログラムに関わるスキーム、システム、サービスの各機能について、IOT を視野にいれながら今後の産業クラスター計画を実施する方法についてプログラムの観点で報告した。

◆P2M 関連の自由論題トラック 【報告者:座長 岡崎昭仁】

本トラックでは、4 題の発表があり、全ての発表について白熱した議論が交され、会場内は活気を帯びていた。座長の私見として、活気を帯びた理由は 4 題の発表が、日本の産業界の課題を解決する方向性を示唆しているからである。以下に各発表の概要を報告する。

まず 1 題目、亀山は「科学技術イノベーションにおける価値創造プロセスと P2M」と題して発表を行った。研究者が自身の研究テーマをいかにして実用化・事業化に導いていくかという、今後日本の産業界が独自の技術で発展を続けるために大いに参考となる講演であった。研究開発効率化は「研究開発マネジメント×経営マネジメント」であり、バックキャストとフォワードキャストを含む、オールキャストで研究開発から実用化を進める、といった興味深い内容である。研究者は、夢、すなわち実用化された時のロジックモデルを描き、日々の研究活動を進めなくてはならないと痛感させられた。今後の研究の進展・展開に大いに期待する。

続いて 2 題目、山中は「企業向けソーシャルネットワークを活用したプラットフォームマネジメント」を発表した。国境を越えた企業活動のグローバル化が進展する中で大変重要な研究課題である。個人向けの SNS: ソーシャルネットワークサービスは幾度も知られているが、講演では企業向けの SNS の事例・機能・効果への評価、そして P2M を反映した企業向けプラットフォーム在り方、企業における SNS 実践事例からの考察など示唆に富むものであった。今後の研究の進展に期待したい。

そして3題目、山根は題名を「研究開発プロセスにおけるリーダーシップのあり方とマネジメント機能について」とし、発表した。これまでに研究事例が少ない、「MCS:マネジメントコントロールシステム」を企業における研究開発改革事例へ適用し考察しており、今後、研究開発イノベーション分野において大変に興味深い研究事例である。会場からは、「日本の企業はミドルマネージャの貢献が大きいため、この領域での検討もお願いしたい」、との意見があった。今後の研究の進展に期待したい。

最後に4題目、権藤は「観光客と地元を結ぶイベントプロジェクトにおける Global-CEP の役割の検討 アサクサコレクションの事例」と題して発表した。Global-CEP は、日本の強みを活かす「おもてなし総合サービス産業」を担う総合演出家である。発表では、同人材育成のしくみを中心に、「アサクサコレクション」の事例が報告された。同イベントは、導入前と較べて大幅に来場者を増しており、今後の Global-CEP の展開・活躍が大いに期待される。また、同人材は、講演者が所属する大学によって構築されたプラットフォームにより育成されており、大学と社会の関わり方についても興味深く、更なる研究の進展に大いに期待したい



(報告者 大会実行委員 石川千尋) 当内容にお問い合わせある場合は以下までお願いいたします。
国際P2M学会 お問い合わせ
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
国際P2M学会事務局 TEL:03-5937-5716/FAX:03-3368-2822 E-mail: p2m-post@bunken.co.jp